

浮上

川口瑛璃

いつのまにやら水中がいて

匂いを程よく含みながら溺れている

肺胞の中には、散り散り光る苔が

そぞりと棲みついて居り

呼吸の、またとないワンツートを

マツチポンプの錆びついた　ごとく

侵略している

太陽のヴェールは、蠟を垂らして時を止めた

ままの姿で

どうだ、輪切りになろう

美しいカルパッチョの肢体のみとなり

みちがえるようにほどかれて

原風景に迂回してゆけたなら

掬ってはほかり、質量を

秤で掬ってはほかり

えてして氾濫する

ヒトにうまれてしまったばかりに

這いあがるさまが　かくも醜いか

熱以外のきっかけをも、またとない犠牲とし

ゆたかに歪むいとなみが

一足飛びの要領で

まことしやかにうつろってゆくのだ

まだ、満ち満ちてゆく隙間がある
じきに麻酔が効くでしょう

あなたはひどくかるく
わたしはぬて、とおもい
純粹な質量の話であったなら
どんなによかったろう